悲想感　とある男の超不幸物語

zeke

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

不運な男の不幸はここから始まった。

童貞１６年の男。

ただ一つの願い。絶世の美女が彼女に欲しいと願った事から始まる狂乱カーニバル。

息抜き程度に書いてますのでかなり更新が遅いです（？超重要？）

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 11
第3話 …… 23
第4話 …… 31

第1話

「さてさて、此処は何処だ？」

万華鏡を覗いているかの如く、気持ち悪くなりそうな世界に俺は居た。

記憶にあるのは昨日の晩にナポリタンを3杯喰って満腹で布団の中に入った記憶しかないのだが…もしや!?

「ご名答！君は死にました」

声の主はいきなり前方から忍者の如く現れたピエロの仮面を被り、ローブを羽織った小さな子供だった。

って言うか想像していたのと違った!?

俺は夢かと思ったんですけど!?

「僕の名前はロキ。悪神ロキ、聞いた事があるよね？ま　さ　か　知らないなんてないよね～？」

全く知りません。

「僕の名前を知らないなんて古今東西、未来永劫、どんな文明や文化を持つ、それこそ異世界や宇宙人以上の馬鹿だよ君。アハハハハハハ」

何と言う傍若無人！
此奴シバいたろうか!?
こみ上げる怒りで握った拳を抑えつつ頭をクールダウン、クールダウン。
「んで、その小便臭い乳離れ出来て無い餓鬼がお兄さんに一体何の用かな～ボク～？」
餓鬼の頭を鷲掴みにしてニコヤカナ笑顔で尋ねる。
前言撤回。怒りを抑え込みきれませんでした。
餓鬼を鷲掴みした親指と小指はロキとか言う餓鬼のこめかみへと食い込む。
「アハハハハ。そんなに粋がるなんてお兄さん可愛いな～「くたばれ！」ごふっ！」
背筋がぞっとしたので、アイアンクローをしている餓鬼を勢い任せて地面に叩き落とし、仰向けに成った状態のロキの腹を踏みつける。
俺の中の第六感が此奴は色々やばいと警告している。
此奴一人を滅ぼして１６年間続いた俺の貞操が守れるならば安い取引だ！
つまり、俺は童貞だ……
「そんな痛くされると興奮しちゃうじゃないか」
恍惚とした表情で俺に腹を踏まれながら口を開く餓鬼……否、ロキ
此奴は色々と終っていたようだ。
★☆★

「ほうほう、君が面白そうだから俺を命を強制的にこのノートに書いて終わらして魂を此処に拉致ってきたと……」

俺の右手にはデスノートと全く一緒のノートが握られており、中には真白なページが幾重にもあり、ノートの最初のページに俺の名前、南祐希の文字が記されていた。

そして、目の前には両手両足を縛られて芋虫の如く転がっている悪神様の無様な姿がある。

あれからロキを気絶させあの空間を探索すると丁度良いロープを見つけたので貞操を守るためにロキを縛っておいた。

「うん、そうだよ。君が気に入ったから魂を此処に連れてきちゃった☆」

…なんでだろう?此奴が言うと身の危険を感じずにいられないのだが……

「あ、因みに僕は両刀使いだからね☆男も女ＯＫだよ」

「知りたくない情報でした!」

ロキの知りたくもない性癖を暴露され苛立ちと不安を覚える俺はその場からバックステップの要領で５ｍ離れる。

「そんな君に僕からのプレゼントだ!」

ロキがそう言うと俺のすぐ前方に大きさからして２０?位の立方体の箱が現れた。

箱に手を伸ばすと箱は自分の意志でも持っているかのように俺の掌にのると開かれ

た。
　箱の中に入っていたのは……指輪だった。
「僕の愛を受け止めてくれ」
「いるかぁ!?」
　ロキの言葉を聞いてすぐさま箱ごとロキの頭へと投げつける。
　此奴…殺す!
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ?」
「はは、何がかな?」
「懺悔と神への祈り、お葬式の準備、最後にこの世の未練等々だ」
「僕は神だよ?僕が僕に祈りを捧げるなんて面白いね☆」
「……」
　俺はただ拳を鳴らしながら無言でロキへと近づく。
　この怒り、目の前の神を屠れば幾分か晴れる事だと信じて。
「ハハ、如何したの?そんなに怖い顔して?思わず襲いたくなっちゃうよ」
　後ずさりしながら言う神の発言など戯言に等しい事を俺は知っている。
　コンディション絶好調。怒りのボルテージマックスな俺。
　負ける要因が一つもない。

「くたばれ！糞神！」
圧倒的な拳の連打。
顔、腹、背中、脚、相手の体の至る所に拳を叩きこむ。
相手が神ならば力加減は必要あるまい。
全ては俺の貞操と未来の為に。
俺の童貞が男の幼児に奪われたなんて事実は作りたくない。

「ほほう、それで小便臭い餓鬼の姿をした頭の痛そうな神であるあんたは、俺を手元に置いておきたいから自分の管轄の中に入れておこうと思ったわけね」
あれからリンｔ……じゃなくて、せっかｎ…でもなく、肉体的な拳を使った一方的なＯＨＡＮＡＳＨＩを目の前にいるロキの頭に思いをぶつけお釈迦様宜しくなヘアースタイルにしたわけなのだが、まあ聞く限り事情を聴いたわけなのだが、気に入ったから拉致ったってどうなのよ?!
「んで、俺はあんたと一つ屋根の下で暮らせと言うのか?」
一応聞いてみる。
ＹＥＳの場合、此奴は確実に仕留める。

例え刺し違えてでも仕留める！

「いいや～、君を僕の管轄の中に置いておきたくてね～。だから、君を僕の管轄の中に入ってもらえされすればＯＫなんだけれども……あ、勿論僕と一緒に２４時間３６５日永遠に居てくれても構わないよ。その場合永遠の寿命を与えるし、首輪付きで衣食住全てに困らない様にしてあげよう。何ならおやつをあげても良いよ！」

「クタバレ！」

唾をピエロのお面をつけたロキの顔に吐き、腹を思いっきり蹴り飛ばす。

断じて虐めではない！正当防衛だ！

俺の貞操が今失われようとしているのだから正当防衛も成立するだろう。否、成立しなければならない！成立しなければ正当防衛の意味も価値も無い！

「分かったよ」

「ほう、解ってくれたか」

「うん、君の気持ちは十分に分かったよ」

「んで、俺は如何すればいいんだ？」

「そうだね～、君はインフィニット・ストラトス。通称ＩＳの世界に行って貰おう」

「アイエス～なんだそりゃあ？」

「そう言う物語の世界さ。僕の管轄だから好き勝手にしてくれても構わないよ。原作崩

壊しようが原作通りに進ませようが君の自由だ」
「ふ～ん、俺はＩＳとか言う所に飛ばされるのか～。原作知らねえからぶち壊しとかできないんだけれども……」
「まあ、ざっくりいうとＳＦの世界だよ。ＩＳって言うパワードスーツを着て戦うバトルものさ。さあ、プレゼントを受け取って貰えなかったから君に特典をあげよう」
「特典？なんだそりゃあ？」
「ほら、新品のゲームを買った時にあるじゃない！」
「あ～、付録か」
「さあ、好きなものを言ってみたまえ！何でもかなえよう！ただし、三つまでだ」
三つか～。
俺、童貞だったし彼女が欲しいな～
奇麗な彼女。しかも、絶世の美女。
うん、決めた。
「それじゃあ、絶世の美女を！」
「うん、良いよ。他には？」
うほ！マジか!?気前良いな神様！
これで俺も彼女持ち！

しかも　絶世の美女だぜ。美女！
童貞臭プンプンする？知った事か！これでリア充の仲間入り！
「他は……物語の知識とそれの補助道具」
「成程。原作知識とＩＳだね。ＯＫ、逝ってらっしゃい」
あれ、何かニュアンスが違ったような気が……
そこで俺は意識を手放した。
○　　○　　○
気が付くと何処か知らないベッドの上に俺は寝かされていた。
成程、此処から物語はスタートなのか。
そ　れ　で　俺の彼女は!?
絶世の美女！
絶世の美女である彼女は何処へ!?
あ、あれか!?幼馴染的な展開か!?

等と思ってた時期がありました。
５秒前まで
あれから部屋を捜索していると鏡と遭遇しました。
はい、普通にどこの家にもありますよね？鏡
神様は約束を果たしてくれました。
はい、全て俺が悪かったです。
だけど、一つ言いたい

【何で俺が絶世の美女に成ってんだ！ごらあああああああああ!!】

ご近所迷惑上等で叫ばさせて頂きました。

鏡に映った俺自身の姿、それは絶世の美女以外の何物の姿でもなかった。

第2話

一叫びして落ち着いた俺。
今の状況を整理する。
俺はＩＳの世界についた。女尊男卑の糞世界。
まあ、ＩＳとかいうパワードスーツが女性にしか扱えないのがいけないと言うのが原作知識で望めば解ってしまう。
成程、状況整理からすると俺は、良くも悪くも女（絶世の美女バージョン）に成ったのが不幸中の幸いだと言うのか。
うむ、理解はできる。
理解は出来るが……
「納得出来ねえええええ!!!!!」
頭では理解してるんだよ！
でも、でも、納得出来ねえよ!!

折角、美女が手に入ったんだぜ!?
目の前に居るよ！鏡の中だけれども！中身自分だけれども!!
でも、Ｈはおろか手を繋ぐ事も出来ねえってどうよ!?
原作知識でＩＳが女性にしか反応しないってわかるよ！
知ってるよ！
でも、そこを何とかするのが神様の力量じゃないの!?力じゃないの!?

「クッ！」

せめて主人公に成りたかったよ～。
え～、何主人公？ハーレム、美少女囲みやがって！
調子こいてんの？死ぬの？死にたいの？自殺願望者なの?!
童貞歴１６年、絶世の美女を前にしてＨはおろか手を繋ぐ事さえも出来ないなんて……蛇の生殺し以上じゃねえか!?
一種の拷問だよ！拷問以外の何物でもないよ！
女に成った俺とハーレム囲った主人公との雲泥の差。
俺、何も悪い事をしてないよね!?

普通に学校通ってた男子高校生だよ！
Hな本を買う勇気もなかったチェリーボーイだよ！
女の子と手を繋ぐ事はおろか、校舎裏で呼び出されて告白される事も無かった普通の男子高校生だよ！
それなのに何!?
普通に生活してたらある日突然小便臭い乳離れしてない餓鬼が現れて君、気に入ったから殺しちゃった☆とかほざくんだよ！
さっきは拉致だと思ったけど、俺殺されてんだよ！神様に！

いや、そりゃあ善人じゃないから俺に悪事だってあるさ。
いきなりチンピラがぶつかってきて「手前、何ぶつかって来てんだよ！ああん!?」とか調子こいて掴みかかって「金だせや！」ってタカってきたから股間を思いっきり踏みつけて前かがみに成ってもだえ苦しんでいる所に丁度膝が相手の顔に入っちゃった事故があったよ。
んでもって、相手の財布が上着のポケットから出て落ちた所をどら猫では無く、腹を空かせた野良犬が相手の皮財布を食料だと思ったのか咥えて持って行っちゃった事があったよ。

流石に可愛そうになって5時間位財布を探した事もあったけれども、あれ、俺の過失じゃないよね!?
結局財布は見つかんなかったし、その所為で学校遅れて生徒指導室の先生が激怒したけれども俺の過失じゃないじゃん!?

相手を怪我させちゃったって言う悪事が俺にもあるよ。
でもさ、俺以上に酷い事をしてる奴なんていっぱいいるじゃん！
何でそいつじゃないの？
俺って不幸の星の許に生まれてきた少年なわけ？
でも、不幸はチンピラが一回タカってきた時だけで、それ以外何もなかったよ。
それなのに、なの？

しかも、付録というかおまけで貰ったＩＳがさ～、デスティニーガンダムって言う機体なんだけれども……核使ってんだけれども！
馬鹿なの!?
ねえ、神様、あなた馬鹿なの!?

撃墜されたら爆発落ちしか想像できないじゃん！
しかも、核爆発だよ!?俺、死ぬじゃん！

しかも、さあ、シールドエネルギーが無くても動きますって寝ていたベッドの横にあった説明書に書いてんだけれども、現代のＩＳに喧嘩吹っかけてるよね？
シールドエネルギーが∞な機体って、ふざけてるよね!?
どうやって、勝負つけるんだよ！

しかも、ご丁寧に機体の待機時は指輪だし！
……まあ、指輪は指輪でもネックレスに出来るように成ってたから良いけれども、薬指にはめて取れなかったら俺、自殺してたよ！
冷たい海にダイブして死んでたよ！

俺のＩＳ　デスティニーガンダムは非固定武装ではなく、固定武装だけれども火力がどれだけ強いか解んないけれども、ここは火力が弱いと信じておこう！
うん、それが良い。と言うか、世界各国血眼に成ってＩＳの親、篠ノ之　束博士を探してるのもＩＳのコアが欲しいからだよねえ!?

って事は、俺が持ってる事を知られたら……俺、拉致られるじゃん！
下手をすれば殺されるじゃん！
逃亡すれば指名手配犯扱いされるじゃん!!!

あ～、もう、これはあれだな。
うん、ＩＳ持ってる事をばれない様にすりゃあ良い。
って事で、まず不貞寝だ。不貞寝。神の思し召しだ不貞寝しろっていう。
うん、寝ればこんがらがる頭も少しばかりマシな働きに成ってくれるだろう。うん

不貞寝して頭もすっきりした俺だが、汗でべた付く服が不愉快極まりないので風呂に入ろうと思ったのだが……今現在地の居場所がまず解んない。
鏡を発見した瞬間に自分の姿に絶望したから周囲を探索出来て無いから解んないけれども……ここ、何処よ？
何か、メカメカしい残骸がベッドの周囲に転がっているんだけれども、ここは何処なの？

「あ、起きたんだ！面白そうだから拾っちゃった♪」

声のする方向に視線を向けるとそこには、頭に兎耳をつけ不思議の国のアリスを思わせる格好をした篠ノ之　束博士がいた。

「あ、あの！貴女は、篠ノ之　束博士で俺、いいえ僕を拾ってくれたんでしょうか？」

まさかの篠ノ之　束博士に遭遇するとは！

「うん、そうだよ～」

マジか!?普通の人なら景色同然の如く扱われるのに、篠ノ之　束博士に助けられるとは思ってもみなかった。

「助けて頂いてあ、ありがとうございます！」

やべえ、感動で涙が流れる！

「うんうん、まあそんな事よりも君……ＩＳ持ってるよね？」

「!?」

何で知ってるの!?
いや、何でわかるの?!
誰にも話してないぞ、俺！

「ふふ、何で知ってるの？って驚いた顔をしてるね～」

「……」

「脈拍数も上がって無言。これは肯定と受け取っても良いかな～」

面白そうにそう言う篠ノ之　束博士。
だが、俺にとってこの状況はピンチでならない。
原作知識を知る俺にとって彼女の戦闘能力はＩＳ装着状態の俺も無力化できるだろ

う。

ならば、ここは選択肢は一つしかない。

指輪で待機状態と成っているＩＳ　デスティニーガンダムを篠ノ之　束博士に向けて渡す。

「…これがＩＳです」

俺の選択肢、それは強力な相手との戦闘を避ける事。

目の前の篠ノ之　束博士なんかがそうだ。

心身ともにハイスペックな彼女を敵に回すハイリスクな選択肢は避けるべきだろう。

勝てぬ戦はせぬ事だ。

何よりも恩人に刃を向けるのは俺の良心が痛む。

面白そうなおもちゃを見つけた表情で篠ノ之　束博士はＩＳを受け取るとしげしげと眺め、何やら道具を取り出してＩＳ　デスティニーガンダムをいじり始める。

「ふ～ん、私が作った事のないコアだけれども……如何したの？」

尋ねられてはいるが今現在の俺の立ち位置は目の前の篠ノ之　束博士に命を握られていると思って構わないだろう。

この人に嘘は通じない。

何よりも今の俺ではこの人と勝負に成らない。

次元が違いすぎるのにＩＳを奪われた俺では最早勝負以前の問題だろう。

「……俺、いいえ僕は転生者です。その時の付録でそのＩＳを貰いました」

戯言だと思われるだろうか？それとも、気に入られるだろうか？

これは賭けだった。５：５の賭けだった。

気に入られれば俺の話を聞いて貰え、下手をすれば何かしら手を貸してくれるかもしれないという希望的観測も視野に入れた賭けだ。

気に入られなければ追い出されるかもしれないし、ＩＳを引っぺがされて終わりかもしれない。

「……ふ～ん。転生者ねえ」

博士は笑みを浮かべて俺を見る。
ついに結果がわかる。
ゴクリと生唾を飲み込み博士を見る。

「道理で君が私の研究所に居たのか説明がついたよ」

「……ハ？」

博士は今、何と仰いました？
私の研究所？
俺の耳が可笑しくなければそう仰った。

「うん、君は私の研究所に倒れていたんだよ」

成程。今一つだけ解った事がある。

俺の不幸はどうやらかなり酷かったらしい。

第3話

「ふんふん、成程ね～。このＩＳを考えた奴はキチガイだね。ＩＳに核を搭載してシールドエネルギーを無限にする、か～。理論上も可能だからこうやって出来るけれどもこれじゃあ、今のＩＳのあり方を否定してるね。まあ、別に良いけど。ただ、気に食わないのが操縦者の事を考えていないって言うのが気に食わない」

今、俺は博士に研究所のとある部屋に連れて来られている。

博士は俺が渡したデスティニーガンダムをスキャナーの様な機会に通してデータを取っている最中だ。

博士も核を積んでいる事にご立腹だ。あの篠ノ乃　束博士が操縦者の事を考えるなんてイメージが少しばかり崩れる。

「ほい、データが取れたし返すね」

博士はデスティニーガンダムを俺に返すと、ズイッと顔を覗き込んでくる。

「んで、君はどうする？それを使うのも良いけど、新しいＩＳが欲しくない？この篠ノ乃　束さんが、君にぴったりのＩＳを作ってあげよう！何が良い？遠距離？中距離？近距離？ふふ、勿の論で君にも協力はして貰うけれども」

面白そうに束博士は言うが、俺は束博士の腕を掴むと、
「俺は……僕は、貴女とずっと共に居たいです！」
原作だとＩＳ学園に行く事自体が色々イベント発生場だし、束博士に着いていけば、少なくとも学園イベントは回避できるはず！
「えっと～、流石にそれは想定外かな～」
眼をまん丸にする博士。
ん？何かが可笑しい。
記憶を巻き戻してみれば、君どうする？→貴女とずっと共に居たいです。……告白してるじゃん!!
やばい。俺、博士に告白しちゃってるよ!!!出会ってそうそうの告白だよ！
「えっと、あのですね!?」
頭をフルに使って言い訳を考えてみるが一向に浮かばない。
「流石に私も女の子はちょっと……ね」
「僕は男です！こんな感じで体は女ですけれども、ベースは男ですよ！転生の際に１６年間童貞で恋人もいなければ女の子と手を繋いだことすらなかったのに、いきなりロキとか言う男の神様が現れて好きだと告白されたんですよ!?あなたに解りますか？この感情！同性愛でもないのに好きだと言われたんですよ!?しかも、好きだから殺しちゃっ

たとかほざやがるんですよ！ここに転生する時にここの知識と補助道具、それと絶世の美女をくれと言ったのに、神がくれたのは絶世の美女の体！Ｈするどころかお手てすら繋ぐ事も出来ない僕の苦悩が貴女に解りますか!?」

堰をきったダムの様に眼から涙があふれ出し、束博士に胸の内にたまった思いを吐きだした。

「えっと、そのごめんなさい。良ければ胸を貸すよ？」

束博士は俺の顔が凄いけんまくだったのか、若干の引き気味。

「うう、お借りします」

俺は、暫く束博士の胸をお借りして泣いた。

束博士の服が俺の涙と鼻水で汚れ、俺の眼からも涙が出ることが無くなるほど泣き止み、頭も先程の様な感情が高ぶっている時とは真逆に冷静になった時、俺は今現在の状況に気付いた。

【俺は、篠ノ乃束博士の豊満な胸に顔を埋めている!!】

その現状に気が付くと同時に俺の鼻から赤い鮮血が勢いよく飛び出した。

「え!?ちょっと!!尋常じゃないほどの鼻血が噴き出しているんだけども!!」

薄れゆく意識の中、最後に見たのは真っ赤になった博士の服。勢いよく出る俺の鼻血、博士の足もとに出来た俺が原因であろう血の池。そして、俺の鼻血で顔が汚れ、俺を驚いた表情で見てあたふたしている天使の様に思えた篠ノ乃　束博士の姿。

「束さんマジ天使」

グッと親指を立てて束博士に向けると同時に俺は意識を失った。

ただ、一つ解った事がある。童貞歴１６年の俺には女の子の胸を触ると言う事はニトログリセリンの様な危険物扱いだと言う事だ。

○○○

俺が目を覚ましたのは、ベッドの上だった。

時間としては夜だろうか。研究所に設置されている窓には、明かりが入ってこない。

寝かされたベッドには、椅子に座った束博士がもたれかかるように俯いて寝ていた。

博士は服を着替えたのか、最後に俺が見た鼻血で染まった服とは別のジャージに白衣を着た姿だ。

俺の服も博士が脱がしてくれたのか奇麗な服だって、あぶねえ！また鼻血が出そうになった！セーフ、今度はセーフ。イメージもすぐに辞めたし、セーフだ。うん、大丈夫な筈！

鼻を触ってみるが先程、鼻の奥が熱くなったけれども鼻血は出ていない。

良かった～。起きて早々の大惨事は勘弁してほしい。
「起きたようですね」
黒の眼球に金の瞳、銀髪の少女が部屋の入口に立っていた。
原作知識を思い出すと、確かこの子は
「クロエ・クロニクルだったか？」
「はい。博士からはクーちゃんと呼ばれています」
「ならば、俺……いや、僕もそう呼んだ方が良いか？」
「お好きなように」
「そうか。それじゃあ、クーちゃん」
「……」
俺がそういうとクロエ・クロニクルは、嫌そうな顔をした。
「おい、そんな顔をされたら俺はどうすればいいんだ？」
「ご自分でお考えください」
「この……まあいい。それじゃあ」
頭をフル回転させこいつの呼び名を考える。
博士はクロエ・クロニクルだからクーちゃん。呼びやすい名前の方が良いだろうし
……それじゃあ

「クロクロ」
「……」
顔を更に嫌そうにゆがめられた。
それじゃあ、可愛らしく
「クロロン」
「クロロホルムみたいで嫌です」
こいつ、好き嫌いが多いやっちゃな～！クソ！それじゃあ、楽をしてやる！
「クロ」
俺がそういうとクロエ・クロニクルは顔を明るくさせ、嬉しそうな表情を浮かべた。
う、うそだろ!?クロエ・クロニクルだから頭文字二文字をとって、クロだぞ。俺が今まで考えた呼び名は一秒も掛からない程の超適当な呼び名に負けたというのか!?
「ん、んん～。おはよう」
艶めかしい声を出しながら束博士が起きた。未だ眠いのか眼をこすりながらの挨拶だ。
「博士、艶めかしい声はやめて下さい！中身が男なんで性で襲いたくなっちゃいます」
「あらら、名前すらまだ聞いてないのに襲われちゃうのか～私」
クッ！博士がこんなに可愛いなんて聞いてないよ！博士、こんなに可愛かったっけ!?

天災といわれるほどの人物じゃなかったか!?

等と思っているとブッと鼻血が少し出始めた。鼻をつまみ、上を向いて首筋をとんとんと叩いて応急処置を行う。

「はい。ティッシュです」

クロが俺のそばにティッシュを持ってきてくれる。

「……随分と鼻血が出ますね」

「まあ、重度の花粉症だから」

「そうですか」

「鼻をかみすぎて鼻の粘膜が弱ってから鼻血が出やすいんだよ」

俺がもっともらしい事を言うとクロは納得したのか頷く。

騙している俺が言う事でも無いけれどもクロの将来が心配だ。将来、詐欺や変な人に捕まりそうな気がする。

「ふっふ～、重度の花粉症ね～」

博士はニヤニヤしながら俺と黒のやり取りを見ている始末。

何かを感じ取ったのだろうか?

それなら博士はエスパーかニュータイプでは無いだろうか?

「それで、君の名前はなんていうの?」

俺の名前、俺の名前……

「俺。いや、僕に名前なんてありません。博士が決めて下さい」

元の名前はあるけれども、こっちで俺を知る奴なんていない。ならば、新しい名前を貰っても構わないだろう。どうせ、今までの過去なんて思いでだし。

「そう。それじゃあ……」

博士は腕を組み、暫く悩んでいる動作を見せると

「カナ。君の名前はカナね」

「……カナ。俺、僕の名前はカナ！ありがとう博士!!」

嬉しさのあまり博士に抱き付く俺。

「フフ、カナは甘えん坊さんだね～」

博士の優しく俺を撫でてくれる。

ああ、至福の時。博士の柔らかい豊満な胸に埋もれ、頭を撫でて貰える。まさにこの世の楽園。

だが、次の瞬間

プシャアアアアア

鮮血が飛んだ。主にティッシュで栓をしていた俺の鼻から。

それと同時に俺は貧血で意識を失った。

第４話

俺が博士に拾われてから１０日間経過した。

「２４８回、１０００ℓ以上……これ、何の数字だか解る？」

博士の突然の問いに俺は困惑する。

「何の数字ですか？それ」

「貴女がこの１０日間の内にＩＳスーツを着替えるために更衣室に行って今まで自分の体を見てぶっ倒れた回数とその為に使われた輸血量の合計数量だよ!!最初、更衣室で鼻血出してぶっ倒れた時はあまりの出血に死んだんじゃないかと思ってあせったよ！それに、お陰でＩＳスーツの新調が遅れるわ、予定が押し込むわで大変な事に成ってるんだよ！それと貴女、どんな体の構造をしてるの？普通、ここまでぶっ倒れると死んでも可笑しくないよ!?人間離れしすぎでしょう!?ＩＳ以外の事には全然興味が無いけれども、あなたの体構造にはすごく興味がわくよ！何これ？最早ギャグ漫画の主人公みたいじゃない！」

「博士、それはネタバレと言う奴です」

「知ってるよ！知ってるから!!」

「あのですね、博士！自分で言うのも何ですけれども自分、中身は男、外見が超絶美女なんですよ!?童貞こじらせすぎた男子高校生には、美女の裸は大ダメージなんですよ!?」
「え!?男子高校生ってここまで鼻血を出すの!?」
「自分は出しますよ!!」
「兎　に　角　！今日と言う今日は、クーちゃんに着替えを手伝って貰うから早くＩＳスーツに着替えて！じゃないと実験が始めれないよ！」
「……はい」
博士に指示され渋々クロエ・クロニクル、通称クロと博士がいる部屋を後にし、クロエに手伝って貰いながら着替える事に成ったのだが……
「それでは、着替えを手伝いますので脱いでください」
今現在、目隠しをされてクロに手伝って貰いながら服を脱ぎ脱ぎしている。
これは、これで別の意味での刺激が来る！
俺にＭっ気は無かった筈なのだが……なんだ、この未知の刺激は!!
クロの手が俺の体に触れる時の感覚。
柔らかく、ほんのりと温かい小さなクロの手が俺の体にソフトタッチする。
触れるか、触れないか。目隠しをされているので解らない。
これは、心臓に悪いぞ!!

「……鼻血が出てますよ」
クロがそう言って俺の鼻にティッシュを詰めてくれる。
「ありがとう」
お礼を言ってクロと二人で脱ぎ脱ぎ再開。
「!!」
クロの微笑ましい小さな胸が俺の体に触れて声に成らない悲鳴を上げてしまった！
俺は、クロの小さな胸が体に触れた瞬間に体中に衝撃が走った。
まるで雷に打たれたかのようなすごい衝撃。
クロの胸は小さいが確かに柔らかい女の胸だ！
表現し難いが、兎に角柔らかい。一つハッキリしているのは
断じて、男の胸では無い!!
前世で虚しくて自分の男だった時の胸、揉んだ事ありますよ。
やった時の後悔感と虚しさ……半端無かったな～
「あ、鼻血が」
クロのセリフを聞き終わる前に俺は意識を手放した。

「起きて、起きてったら!!」

可愛らしい女子の声を聴き、眼を開くと博士の顔が視線に移った。
柔らかい感覚が俺の後頭部からする。
……これは、まさか!?
伝　説　の　膝　枕　で　す　か　！　？
男だったら彼女にされたい事Ｂｅｓｔ１０に入る伝説の膝枕。
キスしたい、手を繋ぎたい、一緒にご飯を食べたいに連なる、彼女にされたい事。
「俺、もう死んでもいい。我が人生に一片の悔い無し!!」
「カナ、何言ってんの!?」
しれっと博士に驚かれるが、俺みたいに童貞こじらせた男なら仕方ないだろう。
「俺、幸せ者だ。うん、何時お迎えが来ても良いや」
「まだ若いよね!?というか、そろそろ起きて。実験したいから」
ふう、出来る事なら博士の膝枕をもう少し堪能したかった。
だが、それは欲張りというものだろうか……
「何でさめざめと泣いてるのさ!?」
「あ、いや。出来る事ならもう少し膝枕を堪能しときたかったな～って思って」
「そんなに膝枕が良いなら実験が終わったらしてあげるよ」
「マジで!?」

驚きのあまり上半身を起こすどころか、起立して博士を見る。
「良いよ。膝枕くらい」
「やった～。博士大好き」
「現金だな～」
博士とそんな何気ないやり取りをしていると、
「……」
無言で背後に立っていたクロに横腹を思いっきりつねられた。
「#%&#!?」
言葉に成らない奇声に近い悲鳴を上げてしまう。
何なんだこいつは!?クロの握力が半端ない事を思い知らされる。
クロに抓られた事によって尋常では無い痛みが俺を襲う。
「なにこの子!?ゴリラ並みの握力なんだけど!?博士、この子怖いんすけど……」
「誰がゴリラですか！誰が!!」
青筋を額に多数浮かべ、クロは俺にアイアンクローを仕掛けてくる。
ああ、俺の頭が、頭がっ!!!
「頭が、頭がっ！頭が割れるように痛てえ!!」
ああ、頭の中に温かいものが流れ込んでくる。

もしかして、脳の血管切れたかな～

「クーちゃん、ＳＴＯＰ　ＳＴＯＰ!!それ以上やると本当に死んじゃいそうだからＳＴＯＰ!!実験前に人材が死んじゃったら意味が無いよお！」

束さん、マジ天使!!言葉は、あれだけど…道具としか見ていないようだけど。

束さんのおかげで俺をアイアンクローしていたクロの腕の力が緩み、俺は解放される。

「うう、博士。ひどい目にあったよぉー」

「よしよし」

束の胸に抱きつくと、束は子供をあやす様に俺を慰めてくれる。

マジ束さん天使だよぉ！

もう、束さんが彼女として欲しい。

もう束さんの道具で良いや！

こみ上げてくる鼻血を必死に気力で辛抱する。

「それじゃあ、実験しよう?･カナの専用機を作る為の実験を、ね?」

「うん」

束に促されるまま待機状態の量産型ＩＳ　打鉄に触れる。

直後、俺の頭の中に膨大なＩＳの操縦データが流れ込む。

なんか、不思議な感覚だ。まるで見た事は無いけれども、走馬灯を見ているような自分が自分じゃない感じがする。

「調子は、どう？」

束さんに言われて俺は眼をあけると……

武装、残量エネルギー、行動可能範囲、操縦方法、今現在の位置情報と周辺情報、その他諸々がまるでヘルメットを被っているみたいに画面の隅に表示され、画面の真ん中には今現在の俺がいる博士の実験場の様子が映し出される。

「良好です」

俺は、ＩＳを纏っていた。

気分も普通。

と言うよりも、初めてＩＳに乗った為、気分が高揚している。

ガンダムに初めて乗った時のアムロもこんな感じだったのだろうか。

「それじゃあ、そのまま上昇してみて」

束さんの指示通りに上昇するため、表示されているＩＳの操縦方法通りに体を斜め前に僅かながら傾ける。

すると、ＩＳは非固定ユニットのスラスターを噴かせながら地面から１ｍ位上空まで移動した。

『ＯＫ．凄いよカナ！今簡単にＩＳ適性を測定するついでに動かして貰ったけど、ＩＳ適正はＳに限りなく近いＡだよ。正当な評価で言うならＡ＋＋＋だよ』

博士がオープンチャンネルでそう言って来るが、

『恐らく俺を転生させた時に、あの糞野郎。悪神ロキとか言う変態がそうさせたんでしょう』

『こら、カナ！俺じゃなくて、僕。もしくは、私って言いなさい』

『束…博士の指示ならそう言いますが、博士。図々しいかもしれませんが、それじゃあ一つお願いしても良いですか？』

『何？』

『博士の事を、束って呼んでも良いですか？』

『……う～ん。どうしようかな～』

ハイパーセンサーで見える実験場の地面で測定機器に囲まれた博士は、悩むそぶりを見せていた。

やはりダメなのだろう。

……うん、恋人気分を味わいたかったのだが、これ以上の高望みは罰当たりとなのだろう。

『まあ、良いよ』

そうか。やはりダメかって、良いの!?

『良いんですか!?』

『別にダメな理由ないからね』

やった!

『ありがとうございます!!』

『早速、武装を呼び出して』

『了解しました』

俺は、武装を見る。

武装

・近接武装蠍の尾（スコルピオ）

・95口径特殊レーザーリボルバー平和の作り手（ピースメーカー）

・天使の破滅翼（エンジェルフォール）

この3つのみ。

最後のは、一体何なんだろう?

まあ、良い。どうせ実験中に使うだろう。

俺は近接武装蠍の尾を呼び出する（スコルピオ／コール）

すると、手に紫色の大鎌が現れる。
刃渡り、１．８ｍ程の巨大な鎌だ。
『それじゃあ、これを全部斬って無力化してみて』
束がそう言うと、彼女の傍に１６連装ミサイルポッドが現れ、俺に向かって次々と射出される。
俺は、向かって来るミサイルの弾頭を蠍の尾（スコルピオ）で斬る。
ミサイルの一つを斬ると弾頭がまるで良く研がれたナイフで紙を斬るみたいに、簡単に斬れた。
弾頭を失ったミサイルは、俺の横を通り過ぎ大分離れた距離で爆発を起こす。
『す、凄いよ！束、凄いよ!!まるで紙を斬るみたいにミサイルが斬れるよ！』
『ふ、ふん～でしょでしょ。それは、単分子振動刀（ソニック）を刃に使用しているからミサイルなんて新品のカッターナイフで紙を斬るみたいに簡単に斬れるんだよ』
束の説明を受けている間にもミサイルは次々と俺に向かって発射されるが、俺はそれらの弾頭を全て斬り捨てる。
ミサイルは次々と弾頭を無くし、あらぬ方向に飛んで行って爆発を引き起こす。
『近距離戦のデータは取れたから、それじゃあ次は中・遠距離武装を呼び出（コール）して』
束に指示されるがまま、近接武装蠍の尾（スコルピオ）を収めて次の武装、９５口径特殊レーザーリ

ボルバー平和の作り手を呼び出す。

すると、手にはずっしりとした重量感あふれる巨大なリボルバーが現れた。

『それじゃあ、この的に向かって発砲してみて』

束がそういうと、少し離れた俺の前方に球状の的が3つ現れた。

俺は、両手で95口径特殊レーザーリボルバー平和の作り手を握りしめ撃鉄を起こし、ハイパーセンサーの補助で95口径特殊レーザーリボルバー平和の作り手の照準を的に合わせる。心拍数が上がり、狙いが定まらないが深呼吸をして呼吸を止めると照準が的と重なった。

すぐに、95口径特殊レーザーリボルバー平和の作り手の引き金を引く。

ドゴオオオオンン!!!

銃口から極太のレーザーが打ち出され、俺は予想外の反動で手元が狂う。

レーザーは的を掠めるが、勢いを失うことなく地面に巨大なクレーターを創った。

『それは、6発撃てるからね。銃弾は極太のレーザーだよ～。まあ、威力を追求した分反動が凄いから慣れていくしかないけれどね』

束の説明を聞きながら、俺は的に向かって再度撃鉄を起こし、引き金を引く。

今度は、銃をしっかりと握り反動に負けない様に銃を握りしめる形だ。

全弾撃ち終わるが、的の真ん中には当たらなかった。

代わりに、的の真ん中周辺に6発中3発は命中した。
『それじゃあ、最後の武装に行ってみよう～！』
束の陽気な声がオープンチャンネルで耳に入ってくるが、まあ実際最後の武装天使の破滅翼（エンジェルフォール）が凄く気に成っていた。
９５口径特殊レーザーリボルバー平和の作り手（ピースメーカー）を収め天使の破滅翼（エンジェルフォール）を呼び出すと（コールする）、背中の非固定ユニットがガシャンガシャンと変形し、レーザーで作られた蝶の様な巨大な青白い翼が出現する。
『それは、近距離、中距離、遠距離を総合させた武装だよ。カナが持っていたＩＳの武装をモデルに作ってみたんだ。それじゃあ、これらを撃墜して見せてね～』
束はそう言うと、地面の至る所からミサイルポッドが出現する。
その数、１０や２０なんて生易しい物じゃない。
まるで白騎士事件を思い起こさせるほどの量のミサイルポッドの銃口が俺に向いている。
ドドドドドド!!!
轟音と共にミサイルポッドから一斉にミサイルが発射され、俺に向かってミサイルが距離を縮めてくる。
食らえばシールドエネルギーがゼロに成りそうなくらいの量。

『天使の破滅翼(エンジェルフォール)!!』

俺がそう叫ぶと、画面にミサイルを複数ロックするマルチロックオンシステムが作動し、向かって来るミサイル全てをロックした。

そして、背中の非固定ユニットから出ているレーザーで作られた蝶の様な巨大な翼が動き、まるで蝶が羽ばたくように俺を囲んで飛んでくるミサイルたちを全て破壊する。

俺に向かって飛んできていたミサイルは天使の破滅翼(エンジェルフォール)に当たり、全て爆発を起こして霧散する。

周囲がミサイルの爆発で熱風を引き起こす。

俺はすぐさま博士の許に飛んでいく。

理由は簡単。ミサイルの爆風と破片から博士を守るためだ。

まあ、必要ないかもしれないが……

博士の許へと飛んでいく間にも近接武装蠍(スコルピオ)の尾を呼び出(コール)して博士に向かって飛んで行こうとするミサイルの爆発時に生じた破片を斬って軌道を逸らす。

『束、大丈夫ですか!?』

束の許に着いた俺は、束にそう尋ねるが

「カナ、大袈裟だよ～。天才篠ノ乃　束さんだよ?あれぐらい何でも無いよ～」

当の本人は、あっけらかんとしている。

「それなら、良かったです」
　安堵の息を吐いた。
「それで、カナ。カナから見て、何か改善点はあった？」
「え、あ、はい。武装の蠍（スコルピオ）の尾ですが、確かに凄いです。でも、形が大鎌だったので使いづらかったな～と思いました。それに、天使の破滅翼（エンジェルフォール）ですが大群用で二人での大会ならペアも巻き添えに成りそうですね。ただ、近・中・遠距離総合武装と言う着眼点は凄いと思います！流石です、博士!!」
　博士は腕を組み、暫し考える素振りを見せる。
「フム、……成程ね。と成るともう一つ近・中・遠距離総合武装を考えた方が良いかな？それと、蠍（スコルピオ）の尾の再設計かな？９５口径特殊レーザーリボルバー平和の作り手（ピースメーカー）は、どうだった？」
「やはり反動が凄いですね。ただ、反動が凄いのに見合うだけの威力はありました。ですが、６発と言うのがちょっと心もとないですね。弾を増やす事は出来ないんですか？」
「う～ん。出来るっちゃ出来るんだけど、威力が落ちるんだよね～。でもでも、当たれば一発ＫＯだよ」

「それは、凄いですね」
９５口径特殊レーザーリボルバー平和の作り手（ピースメーカー）のあまりの威力の高さに俺は驚かされる。
一発当たればＫＯって、威力高すぎやしないか？
「まあ、第四世代の試作機としては良いデータが取れたよ」
「第四世代？」
確か装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した世代で織斑一夏と篠ノ乃　箒しか持っていなかった筈だが…もしや、俺が来たことで話が変わってしまったのか!?
「うん。箒ちゃんにプレゼントするため、第四世代の実験機を作ってたんだ～。それが、この機体　ガブリエル。遠・中・近距離全てに、装備の換装無しで対応できる第四世代型機体なんだよ～」
「束、蠍（スコルピオ）の尾ですが、鞭のようにしなやかな剣にしてみたらどうでしょうか？」
「お！良いね良いね！カナ、凄く良いアイディアだよ。それ！蠍（スコルピオ）の尾の再設計が直ぐに始められるよ！これなら、３日間位徹夜すればすぐに完成できるかも!!」
「束、徹夜は駄目です！ちゃんと寝て下さい!!」
「大丈夫だよ、カナ。束さん、細胞単位でオーバースペックだから」

「徹夜したりすると早死にしますよ」
「大丈夫大丈夫」
「束が死んでは、僕が悲しい！お願いですから徹夜はやめてちゃんと寝て下さい！」
「むう、カナは頑固だな～」
「頑固なのは、束の方です！」
「解ったよ。それじゃあ、ちゃんと寝るよ」
「そうして下さい」
「んじゃ、はい。おいで、カナ」
　束はそう言うと正座し、ポンポンと自身の膝を軽く叩く。
「約束の膝枕」
　束にそう言われ、俺は顔を赤くさせながら俯き黙って束の膝に頭を預ける
　あ、あれだ。改めると何だか気恥ずかしいな。
「カナ、顔真っ赤だよ」
　笑みを浮かべる束。
「……束の意地悪」
「可愛いな～、カナは」
　可愛い。中身男である俺にとって褒め言葉であるのだがあまり嬉しくない台詞だ。

だが、何故だかうれしくは無いのだが普段人に関心を持たない束に褒められたためかうれしい気がする。

「これからも宜しくね。カナ」

「はい。束」

こうして、俺のテストパイロットとしての初めての実験は終わった。